

## 館務実習の受け入れ

9月17、18、24、25日

当館では博物館などで働く学芸員の資格取得を目指す実習生の受け入れを行っています。今年度も岩手大学人文社会科学部の学生10名が収蔵資料の整理や聞き取り調査などの実習を行いました。

資料整理は当館の日常業務のひとつで、実習では小国分館に収蔵する73点の[鋸]について計測や銘の観察、記録を行いました。聞き取り調査は、小国地区の新田サトさん、川内地区の佐々木富治さん、佐々木アキさん、木村守さんにご協力をいただき、衣類や生活用具40点について使用方法や製作方法を記録することができました。また今回は、無形の民俗文化のひとつである信仰について、実際に箱石地区に出向いて調査を行いました。片巢集落の石碑や祠10か所を実際にめぐり、古館金重郎さんに由来などを教えていただき記録しました。当館で信仰についてこのような調査を行うのは初めてでしたが、収集された民俗資料がかつて使用されていた環境や背景を知るために重要な調査を行うことができました。

最終日は小国地区の湯澤武さん、菊地務さんご協力をいただき、藁ぞうり作りの体験をしました。縄緬いも初めてという学生がほとんど

でしたが、どの学生も仕上げることができました。また、湯澤キヌ子さん、左澤モヨ子さんには「ほど団子汁」を作っていただきました。「ほど団子」はジャガイモを凍結、乾燥させて作った粉の団子です。あわせて昔の保存食について教えていただきました。午後には高屋喜多男さんの雑穀畑や水車小屋を見学しました。

最後に実習生の感想を紹介します。(一部抜粋)

「片巢集落の信仰の調査では、このような形にのこらない文化を把握し、紙媒体や映像記録として後世に残し、伝えていくのも博物館や資料館の大切な役目なのだとということがわかった。」(アジア文化専攻・佐藤森絵さん)「ぞうり作りの体験では縄をなうのが難しかった。昔は親や年上のひとがやっているのを見て覚えたというお話をうかがって、昔は家で大人が働いていたからそれができ、現在の家族とは関係がまたちがったのだろうと思った」(アジア文化専攻・西村静香さん)



聞き取り調査の様子



片巢地区調査の様子



ぞうり作りの様子

## ◆資料館見学に来て!!

北上山地民俗資料館では、昔の仕事や暮らしの道具をたくさん展示しています。中でも、第一展示室「自然物採集」のコーナーには、昔の人たちが自然にあるものをいかに利用して生きてきたかがわかる資料が数多くあります。例えば下の写真は「ねぶね」といい、よく見ると底板が傾いていて、端に小さな穴があけられています。ワラビ根から澱粉をとるとき使う道具で、底板の傾きは澱粉を含んだ水だけが流れ出るように工夫されたものです。

このように、展示資料を見ただけではどのように使ったものなのかわからないこともたくさんあると思いますので、係りのものにお気軽におたずねください。

また、学校の授業で見学なさる場合、事前にご担当の先生からご相談いただければ、展示解説など、できかぎり対応いたします。



「ねぶね」(「さどぶね」ともいう)

## ★これなあに? . . .

下の写真は「ウバユリ」という植物です。7月から8月に山の沢沿いや林の中で黄緑がかった白い花を咲かせます。草丈は大きいもので1m以上になります。

この植物について佐々木富治さん、佐々木アキさん、茶畑ミヤさんにお話を伺ったところ「ジンベエロ」といって、昔、根を掘り起こして食用にしたそうです。根を掘るのは花が咲く前で、掘り出した根を炉の灰の中に入れて、熱して食べたそうです。冷害などで畑作物が不作の年に、食糧の不足を補ったそうです。



ウバユリ



## ◆企画展「川井村のくずや—昭和の調査から」10月23日～11月3日

今年度の企画展は、「くずや」とよばれていたカヤ葺き屋根の伝統的な民家について過去の調査や聞き取り調査の内容をもとに紹介しました。現在ではほとんど見ることはできませんが、昭和36年の調査によると、当時の屋根の素材はカヤ、トタン、桎、スギ皮、瓦が主で、調査対象となった745戸のうち半数以上がカヤ葺きだったことがわかっています。展示では、屋根葺きの道具、聞き取りによる間取り図を中心に紹介しましたが、聞き取り調査から屋根葺きが集落の人たちの力なくしてはできないものだったことがわかりました。今後は地域の人たちが集まっての屋根葺き作業の様子や、家の各部屋の使われ方などについても引き続き調査を行い、紹介していきたいと考えています。

今回の展示にあたり、木村守さん、佐々木アキさん、佐々木富治さん、去石清右I門さん、新田サトさん、新田トヨさん、高橋金一さん、高屋喜多男さん、田畑キミさん、中村フヂノさん、引屋敷キワさん、山名清一さん、山名崇民さん、山名照満さん、湯沢武さん、芳門マサさん、芳門エイさんに聞き取り調査のご協力をいただきました。展示にあたっては当館名誉館長 名久井芳枝氏にご指導いただきました。また、平成21年度「川井村ふるさと学園いきいき長寿セミナー受講生」の皆さんには「炉」の呼び名についてのアンケートにご協力をいただきました。ここにお名前をご紹介します。感謝申し上げます。



「くずや」のある風景



「カヤしま」をたてる様子



「のぎ鋏」を使ってカヤを切りそろえる様子



「へら」を使ってカヤをさしこむ様子



「さって」を使って軒部分をそろえる様子

## ◆「宮古市北上山地民俗資料館」に

平成22年1月1日に川井村が宮古市に編入合併し、当館も名称が変更となりました。館の運営に大きな変更はありませんがここであらためて利用案内と展示内容を紹介します。

### 交通のご案内

- JR山田線陸中川井駅下車＝徒歩5分
- 岩手県北バス＝106急行川井バス停下車・徒歩3分
- 自動車の場合＝盛岡南インターから約80分、宮古市内から約40分

### 利用案内

【開館】9時～17時 【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始など  
 【入館料】一般 200円（100円）、高校生・学生 150円（80円）、小学生・中学生 100円（50円）  
 ※（ ）内は10名以上の団体料金。 ※館内での写真撮影は原則としてお断りしています。  
 調査などの目的で必要な場合は事前に申請して下さい。

### 展示案内

【第一展示室】「農耕」「自然物採集」「狩猟、漁労、養蜂」「山仕事」「炭焼き」「職人の仕事」「山の神信仰」の各テーマに沿って、山の仕事や信仰に関する資料を展示します。  
 【第二展示室】「宮古街道・ウマとウシ」のコーナーでは、街道の歴史がわかる資料や畜産用具を展示しています。南部曲屋が再現されていて、その内部には衣食住にかかわる生活用具や早池峰信仰などの道具が収蔵展示されています。「製糸」「機織」「養蚕」の資料を紹介するコーナーも整備中です。  
 【第三展示室】「小川医院」の診察室を再現し、山間地医療に尽くした先人たちを紹介しています。

【映像展示室】「館内ガイド」のほかに、村内の皆様にご協力をいただいて撮影した聞き取り調査の様子、民俗資料の使い方の再現や、昔ながらの年中行事の様子などを大画面で視聴できます。

常設展のほかに企画展も開催し、普段は収蔵施設で保管している資料も紹介しています。今後とも小国分館の整備、ホームページの公開や、体験コーナーの設置など、運営を充実させていく考えです。



北上山地民俗資料館外観



第一展示室

## 登録博物館になりました

博物館などの施設は、博物館法で「登録博物館」「相当施設」「類似施設」に区分されています。当館はこれまで「類似施設」でしたが、登録に必要な要件を満たしているということで平成21年12月15日付けで「登録博物館」となりました。

### ●今年度の入館者数 (2月末日現在) (人)

| 一般      | 学生      | 児童        | 団体    |
|---------|---------|-----------|-------|
| 492     | 7       | 9         | 633   |
| 免除・公用一般 | 免除・公用学生 | 免除・公用児童生徒 | 合計    |
| 188     | 10      | 5         | 1,344 |

### 来館者の感想（メッセージノートより）

- 地方の小さな博物館としては展示が充実していました。維持が大変でしょうが、地域文化を伝える意味でも大切に展示し続けて下さい。次回は養蚕展示に期待しています。
- 静岡から来た医師がこの地で開業していたとは縁があるんですね。展示も充実していました。（静岡からの来館者。第三展示室を見学した感想を書いてくださいました。）

## ◆民俗資料のガスくん蒸（11月4日～10日）

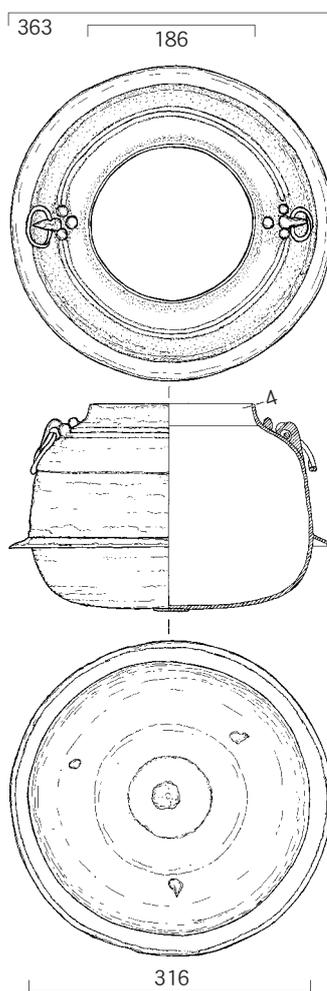
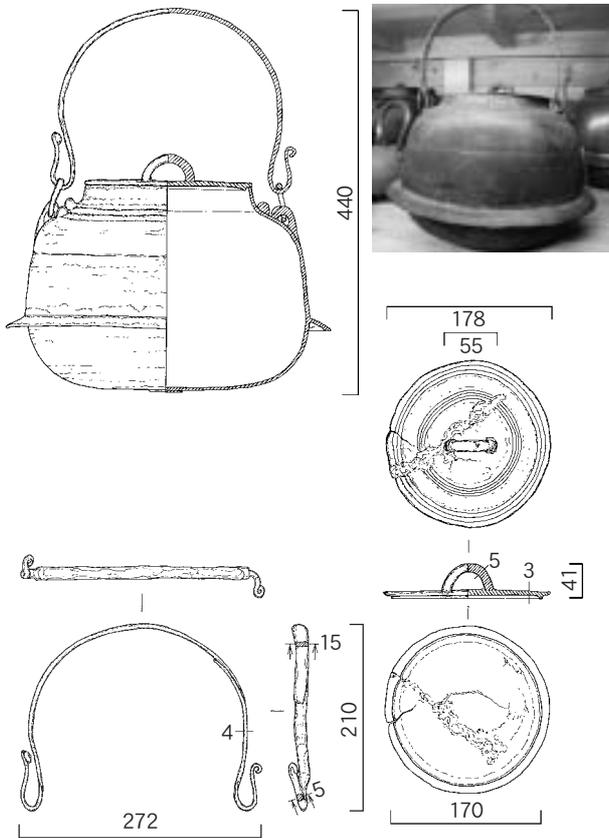
民俗資料館本館の全館ガスくん蒸を行いました。ガスくん蒸は木材や布でできている民俗資料を虫やカビの害から守るために行っています。作業は専門業者によるものですが、くん蒸後も日常的に清掃や点検を行い、害虫がすみにくい環境を維持するよう努力してまいります。また資料の虫害防除については、国や県の文化財保護の方針に沿って、他館の動向を見極めながら、今後もより良い方向を模索してまいります。

## ◆資料の寄贈（平成21年3月～22年2月）

高橋照子様（鉦）、中村孝男様（もんぺ）、芳門留次郎様（書籍など）、旧川井村役場（行政関係資料）、旧川井村教育委員会（旗）

ご協力ありがとうございました。スペースの都合ですぐに展示はできませんが、お名前を明記し、展示資料と同様にきちんと管理して参ります。

**お知らせ** 現在のところ、これまで公開していたホームページは休止中です。公開に向け、努力してまいります。



伝票番号 5731  
 資料名 そば釜  
 話者 三浦嘉久氏  
 三浦チナ氏  
 旧所有者 三浦嘉久氏  
 材料 鋳物  
 使用年代 昭和40年頃まで

**使用方法** 台所の「じる (炉)」で、燃えている「たき(薪)」のそばに[そば釜]を置き、湯を沸かした。

**調査年月日** 2002年8月2日  
**調査者** 森川真理子  
 (岩手大学生)  
**作者** 名久井芳枝

実測図は民俗資料をきちんと計測して図面化したもので、民俗資料の素材、構造、製作技術、外形などの情報を伝達することができます。当館名誉館長の名久井先生は実測図には次の3つの役割があると述べておられます。

**記録保存資料 (未来への情報伝達)**

**啓蒙資料 (一般の人々への情報伝達)**

**学術資料 (研究者への情報伝達)**

作図者がじっくりと観察し、丁寧に仕上げられた実測図は、当館の記録となるだけでなく、他地域や未来へ向けた情報発信の手段となります。地道で労力を必要とする作業ですが、今後も地域の伝統文化を記録する実測図作製を続けていければと考えています。

**お湯のある暮らし**

一月には水仙、二月の終わりに梅の花が咲くという暖かい地方で育った私が、マイナス十度をなげなく記録してしまう北国の冬をもう三十五回経験した。それでも石油の恩恵を受けながら温々と暮らした身には、炉のぬくもりだけで暮らした昔の人々の体感を、未だに実感として掴めないでいる。「いやあ寒かったんだい」と、聞き取り調査の中でいろんな方が話して下さった。それは生温さに慣れ

きつている現代人の私が、三日も経験すれば体に変調をきたしかねない寒さである。昔の生活ができない体になっているとは情けないと思いつつ、いろいろなお話を伺う中で、この「そば釜」は私をホッとさせてくれる存在である。

炉の中で燃えている薪の傍に置かれた釜、それが「そば釜」と言われる所以と考えられるが、その中にはいつもお湯が充ちていた。台所仕事や外から帰ってきた時の手洗いや足洗いは、このお湯が大活躍していたと聞く。「いつもお湯のある暮らし」とは文化的な暮らしの代名詞ではなかったか。冷えきった手をお湯に浸けた時に味わうじーんとしびれるような温かさは、ひとときの幸せを感じさせてくれるが、そのひとときが北上高地で暮らした先人達と共有できる感覚だと思つと、少し肩の荷が軽くなる。燃える火を直接みつめる炉のある暮らしには、危険と隣り合わせに、密かな楽しみもまたちりばめられていたに違いない。

名久井 芳枝  
 (当館名誉館長)